

うまれる

野生動物学研究室教授 高槻成紀

テレビで、中年というより初老という感じの女性が「この子を産んで育てて」という表現をした。なんということはない、よく聞くことばなのだが、そのときは思うことがあって妙にひっかかった。「産む」という感覚は男の私にはもちろんわからないが、それは母親の主體的行為なのか。というのは「うまれる」ということばは「生まれる」なのだと思うからである。つまり「うまれる」というのは赤ちゃんの主體的行為であって、決して受動態の「産まれる」ではないと思うのだ。

親孝行ということばがまだ死語でなかったころ、「生まれたくて生まれてきたわけじゃない」というのは最も親不孝なことばだとされた。その感覚でいえば（本当はうんでほしくないのに、あたかもどこかに強制移動させられたような意味で）「産まれた」という受動態かもしれない。

おもしろい符合だと思うのは、英語でも I was born in April. などという。これは「産まれた」ではないか。でも私は4月に「生まれた」と訳す。誕生日は「生まれた」日なのか、「産まれた」日なのか。

発生学的というのかどうか知らないが、赤ちゃんがこの世に出ようとして「生まれた」

（つまり外界に出てきた）のではないのはわかるが、出産に際してはオロオロしているしかない男親としては、赤ん坊が「産まれた」という表現には大いに抵抗があるのである。やはり天が与えてくださった赤ちゃんが10ヶ月ものあいだ、母親になる人のお腹の中で無事に育ち、狭い産道を必死に出てきて、私たちに会いに来てくれた、ああ、よくがんばってくれたと思うのである。

この文章を書いているのが5月上旬の新緑の季節であり、半年になる長女の赤ん坊がすくすくと育ってくれ、次女のお腹にも次の命が育っているせいで、「うまれる」が気になったのかもしれない。思えば、毎年毎年、春になれば木々の枝先のひとつひとつの芽から小さな葉が展開し、地面からはそれ以上にたくさん種子があって、そこから新しい芽が伸び、小さな昆虫の卵が孵化し、「うまれて」くれる。それは怒濤というにふさわしく、ひとつの命がほんの小さな音でも立てれば、たちまち重厚なシンフォニーになるべきものだろう。みずみずしい命が季節を知って「うまれる」、その太古からくり返されてきた当たり前のことに今年の春は感動を覚えないではいられなかった。